TADOKU JUNIOR　せかいのなぜなに神話　★★★☆☆ ふつう　373語

Why the Dove is Timid

ハトはなぜおくびょう

Florence Holbrook（1902年の本）　原文そのまま　朗読：Raybrite

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　森へ食べものをとりに行くようお母さんに言われた男の子。でも森には大きなクマのフーツがいて、こわくてたまりません。そこへマニトがあらわれて……。



A spirit called the manito always watches over the Indians. He is glad when they are brave, but if they are cowardly, he is angry.

One day when the manito was walking under the pine-trees, he heard a cry of terror in the forest.

"What is that?" said he. "Can it be that any of my Indian children are afraid?"

As he stood listening, an Indian boy came running from the thicket, crying in fear.

"What are you afraid of?" asked the manito.

"My mother told me to go into the forest with my bow and arrows and shoot some animal for food," said the boy.

"That is what all Indian boys must do," said the manito. "Why do you not do as she said?"

"Oh, the great bear is in the forest, and I am afraid of him!"

"Afraid of Hoots?" asked the manito. "An Indian boy must never be afraid."

"But Hoots will eat me, I know he will," cried the boy. "Boo-hoo, boo-hoo!"

"A boy must be brave," said the manito, "and I will not have a coward among my Indians. You are too timid ever to be a warrior, and so you shall be a bird. Whenever Indian boys look at you, they will say, 'There is the boy who was afraid of Hoots.'"

The boy's cloak of deerskin fell off, and feathers came out all over his body. His feet were no longer like a boy's feet, they were like the feet of a bird. His bow and arrows fell upon the grass, for he had no longer any hands with which to hold them. He tried to call to his mother, but the only sound he could make was "Hoo, hoo!"

"Now you are a dove," said the manito, "and a dove you shall be as long as you live. You shall always be known as the most timid of birds."

Again the dove that had once been a boy tried to call, but he only said, "Hoo, hoo!"

"That is the only sound you will ever make," said the manito, "and when the other boys hear it, they will say, 'Listen! He was afraid of Hoots, the bear, and that is why he says Hoo, hoo!'"

マニトというせいれいが、いつも先住の人びとを見守っています。人々が勇かんだとマニトはよろこびますが、おくびょうだとおこります。

ある日、マニトがマツの木の下を歩いていると、森の中からこわがるさけび声が聞こえました。

「あれは何だ？」とマニトは言いました。「わたしが見守る先住の人びとの子どものだれかが、こわがっているのだろうか？」

マニトが耳をすまして立っていると、先住の人びとの男の子がひとり、こわくてなきながらしげみから走り出てきました。

「何がこわいのだね？」とマニトはききました。

「お母さんに、弓と矢をもって森へ行って、動物を弓でうち、食べものをとってきなさいと言われたんです」と男の子は言いました。

「それは先住の人びとの男の子なら、みんながしなければならないことだ」とマニトは言いました。「どうしてお母さんの言うとおりにしないのだね？」

「だって、森には大きなクマがいて、ぼく、クマがこわいんです！」

「フーツがこわいだって？」とマニトはききました。「先住の人びとの男の子は、けっしてこわがってはいけない。」

「でも、フーツはぼくを食べちゃうよ。ぜったいそうだよ」と男の子はなきさけびました。「えーん、えーん！」

「男の子はゆうかんでなければならない」とマニトは言いました。「わたしが見守る先住の人びとの中に、おくびょう者はいてほしくない。おまえはおくびょうすぎて、せんしにはなれない。だから鳥になるがいい。先住の人びとの男の子たちは、おまえを見るたびに、『フーツをこわがった男の子がいるよ』と言うだろう。」

男の子が着ていたシカの皮のマントがぬげ落ち、体じゅうから羽毛が生えてきました。足はもう男の子の足ではなく、鳥の足のようになりました。弓と矢は草の上に落ちました。もうそれをもつ手がなくなってしまったからです。男の子はお母さんをよぼうとしましたが、出てくる音は「ホー、ホー！」だけでした。

「さあ、おまえはハトになった」とマニトは言いました。「生きているかぎり、ずっとハトのままだ。これからはいつまでも、鳥の中でいちばんおくびょうな鳥として知られるだろう。」

むかし男の子だったハトは、もう一度よぼうとしましたが、「ホー、ホー！」としか言えませんでした。

「おまえが出せる音はそれだけだ」とマニトは言いました。「ほかの男の子たちがそれを聞いたら、こう言うだろう。『聞いてごらん！あの子はクマのフーツがこわかったんだ。だから、ホー、ホー！って言うんだよ』とね。」

たんご と クイズ ハトはなぜおくびょう

pine-trees マツの木	**bow** 弓	**arrows** 矢
bear クマ	**feathers** 羽毛	**dove** ハト
timid おくびょうな		

Q1 男の子は、森の何がこわかった？

① 大きなクマ　② ヘビ　③ 暗やみ

Q2 男の子は何になった？

① フクロウ　② ハト　③ リス

Q3 ハトが「ホー、ホー」となくのはどうしてだと言われている？

① お母さんをよんでいるから　② うれしいから　③ クマのフーツがこわかったから

こたえ

Q1 ① 森には大きなクマのフーツがいて、男の子は食べられてしまうのではないかとこわがっていました。

Q2 ② マニトに「おまえはハトになった」と言われ、男の子はいちばんおくびょうな鳥、ハトになりました。

Q3 ③ クマのフーツがこわかったから「ホー、ホー」と言うのだ、と男の子たちは言うようになりました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #22420（Florence Holbrook、1902年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：Raybrite（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは 3 重チェック。人の目でも順次確認しています。